
戦場の兵士 2 = 平和な戦場・帰還兵の戦い =

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場の兵士2 Ⅱ 平和な戦場・帰還兵の戦いⅡ

【Nコード】

N5333F

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

戦場より戻った少年は英雄の称号と共に果たすべき理想を現実と
するため大学へと進学する。気の置けない友、付き合いだけの友人
様々な人物に囲まれ、彼は一人の少女と出会う。命を狙われる彼女
を助けたことで国家に渦巻く陰謀に巻き込まれていく。やれやれ、
面倒なもんだ…。

1・出会い

俺が命を狙われるのは、何か良くないことを知っているかららしい。あの戦争で俺は多くのものを失った。そんな俺からまだ奪おうというのか、俺たちが命を掛けて守ろうとしたこの国は…。

コンサートホールで歌う彼女は所謂歌姫と呼ばれる人種らしい。官僚になることを決めた俺は英雄という立場を利用して某有名大学に入学した。入学試験は免除、学費も半額負担。言うことない待遇だが、時折友人と称する者達につれられてこういう場所に行くことになるのは計算外だった。計算外なことはもう一つあった、入学式の壇上で何故か入学生代表の演説をやらされる羽目になったことだ。本来なら入学試験の主席がそれを行うはずだったのに、生きた英雄の方がマスコミの受けがいいと言うことでやらされたわけだ。おかげで本来演説を行うはずだったやつからは恨まれ、今でもたまに嫌がらせを受ける。

だが、その嫌がらせというものは存外稚拙で、死線をかいくぐった俺にとっては可愛らしいと感じる程度のもだったため、退屈な学生生活のよい暇つぶしとなってこちらとしては大歓迎だったのだが…。

まあ、あいつのことは今はおいておくとして。俺は歌姫の声に耳を傾けるふりをしてホールを見回した。

あの戦争でこの国が受けた被害はけっして小さいものではなかった。しかし、復興にはそれほど時間はかからず4年経過した今では経済状況も平常時と変わらない水準まで持ち直すことが出来たようだ。

今となつては週末にこうしてホールに足を運ぶことが出来るほどこの国は安定している。

敗戦国であるにもかかわらず、この国の人間は誰も戦争に負けたと実感していない。これがこの国の国民かと肩をすくめる俺を見て隣に座る友人は俺が退屈しているように映ったのか周りの迷惑にならない程度の声で話しかけてきた。

「君はこう言うのは苦手そうだね。」

苦笑を浮かべるそいつも言ってしまうえば今回の被害者みたいな者だった。エドと名乗ったそいつは入学式の時も隣の席で、理事長の退屈で長い話を聞いて居眠りしていた俺を演説の前に起こしてくれたやつだ。

お前もな。と俺が答えると、

「違うない。」

といつて席に身を沈めた。なかなか胆力のある奴だ。ゼミも同じになつて付き合う内にこいつはタフな野郎だと感じるようになった。何より嘘をつかない。それが俺にとっては好印象で、気がつけば授業や昼飯、週末などこいつと付き合う機会が多くなっていた。

俺は官僚を目指してこの学校に入ったといつて周りの連中は特に驚きも関心もなかった。なぜなら、この学校に通う連中の殆どは俺と同じ目標を持って入学した奴らばかりだったからだ。その分皆優秀で、試験免除で入学した俺は最初の半年間、奴らのレベルに追いつくことに精力を使い果たした。そうすると不思議なもので、今まで毛嫌いしていた勉強というものがどことなく板に付いてきたように感じられたのだ。どうやら、俺は勉強向きな人間だったらしい。それが、この半年間で出した俺の結論で、今になってはそこその成績をキープできるようにまでなれた。といつてもトップとは雲泥の差だが、いつか追いついてみせると意気込める程度にはなれたといつたところか。

「そういえば、次の大統領選はどうなると思う？」

唐突にエドはそんな風に話題を変えてきた。大統領選か、巷ちまたでは

ホツトな話題だが、正直なところ俺にとってはどうでもいいことだ。俺は、そうだな。といって考えるふりをする、選挙に出馬する候補者の中で唯一覚えていた奴の名前を挙げることにした。

「アイゼン・ハールか……。やっぱりみんなそういうね。」

エドの顔が少しかげった。なんだ？嫌いなのかあいつ。そう聞くとエドは何も言わずに首を縦に振った。

アイゼン・ハール。前の戦争の英雄の一人で、戦争には負けたがやつが指揮した部隊は多くの功績を残し、前大統領から一等栄誉勲章を授けられたらしい。現在は退役しているが、なるほどそんな彼が大統領選に出るのはある意味王道だなと新聞を読んで感じていた。何せ、レベルが違いすぎるとはいえ同じ英雄である俺が官僚を目指すぐらいだから、大統領になりたがる英雄も現れるだろう。正直俺もあいつは好きになれんがね。

テレビでやっていた出口調査では、並み居る候補者を押しつけて堂々のトップになっていたから当選はほぼ確実だろう。今日もここに来る時に街頭で演説をしていたのを目にした。あいつを信仰する友人を引っ張ってくるのは苦労した。人気者は羨ましくはないが、面倒だ。

ふと、気を逸らしていたらコンサートホール全体から銃弾の雨のような拍手がわき起こり、全席に座っていた連中がみんなこぞって席を立てて手を打っている。ふん、殆ど聞いていなかったがとりあえず俺も做った方が良さそうだな。

俺は立ち上がると手のひらが痛くならない程度に拍手を送った。全く心がこもっていないのは自覚するまでもなく分かっているがどうでも良かった。

「君の拍手は心を打たれるね。」

と後でエドから皮肉をもらわれそうだが、それでもまあいい。

名前を忘れてしまった歌姫は有名なピアノ伴奏者と握手を交わし、未だ鳴りやまない拍手に対して深々と頭を下げキスを贈った。

俺たちは比較的舞台から近い席に座っていたため、時々彼女と視

線があつたりするが俺は取り合わなかった。他のものと比べて少しばかり俺の所に長く視線をおいていたような気がするが、まあ気のせいだろう。自意識過剰は控えた方が良さな。

それにしても、この女。どこかであつたことがあるような気がする。当然有名な人だから雑誌やテレビに出演することも多いが、そういった感触ではなかった。なにかこう、埃っぽい印象と一緒に思い出されるのだ。

歌姫は最後にアンコールにこたえ、初めてミリオンセラーを記録した有名な歌を披露し舞台を去っていった。

「素晴らしい歌だったね。来て良かったよ。」

という自称友人に、ああそうだな、心が洗われるかのようだ。と全く心に思ってもいけないことをすらすら口にし、流れる人の波に乗ってホールから出た。

「さて、どうする？カフェにでも寄つていこうか？」

自称友人の一人がそんなことを言い出したが、残念なことに俺はそれに乗り気ではなかった。正直なところ人混みによってしまったのだ。さつさと寮に帰ってシャワーを浴びたい。この窮屈な服装から解放されたい。その欲求が勝り、普段なら仕方なく付き合う所を今回はおいとまさせてもらうことにした。

少し残念そうな某友人と、一人だけ逃げ出してずるいという視線を投げかけるエドに今日の感謝と付き合えないことへの謝罪を口にし、さつさと帰ってしまうことにした。

大通りは先ほどの会場から出てくる人の波にのまれ、とてもではないが歩ける状況ではない。仕方ない、裏道を通つてかえるか。少し大回りになるが、ほてった身体を冷やすにはちょうどいいだろう。俺はコンサート会場の裏道、通常ならホール業務員の通用口がある道へと姿を消した。

この国はストリートチルドレンを生み出すほど貧富の差が激しいわけではない。しかし、その中にあつても社会からあふれた人間はいる者だ。

裏路地に点在する新聞紙を布団にして眠る者達の間を縫いながら、俺は道を進む。時折、俺の足にすがりついて物乞いをする者もあつたが、俺はそういう場合だけ幾らかの小銭を与えることとしていた。彼らの多くは誇り高い。そうやって縋り付く者は比較的少数なのだ。がそれでも数が少ないわけではない。俺は殆ど雀の涙程度にしか学費を払っていないので、実は金には困っていない。

従軍していた数年分の給料と、捕虜になつていた数年分の給料、そして英雄として与えられた報奨金で実際の所4年程度なら学費の全額を負担しても十分やつていける程度には蓄えはある。半分ほど親元に残そうとも考えたが、父親がそれを許さなかつた。

「子供から施しを受ける親が何処にいる。」

といわれてしまえば手を引つ込めるしか他がないが、時折こんな風に贅沢をしていていいものかと思つてしまう。といつても俺の周りにいる奴らに比べれば十分質素な生活を送つているわけだが。

そんな風に当てもない思考を巡らせていた俺には突然開いた扉にとつさに反応することが出来なかつた。

「きゃっ。」

そんなどこか可愛らしい悲鳴を上げて、扉から出てきた人物は俺とぶつかり危なく転びそうになつた。俺は今度ばかりはとつさに反応し、その手をつかみ何とか彼女が転ばないように支えた。

綺麗な手だ。白魚のようなというのはこういうのを言うのだろうか。それは女のように、襟を立てたトレンチコートに身を包み鍔の狭い帽子を目深にかぶつてメガネをしていた。どこか怪しい、しかしよくよく見ればその内にある表情はとんでもない美人であることに気がついた。

俺はすこしだけ心臓を高鳴らせると、とりあえず非礼をわびた。

どうやら俺が悪漢ではないことを分かつてもらえたのか、彼女はホッと一息つくと、こちらこそ失礼いたしました、とまるで貴族のような仕草でちょこんと頭を下げた。頭を下げつつも上目で俺を伺つている以上、まだ完全に警戒心がなくなつたというわけではなさ

そつだ。まあ、当然だな。こんな裏路地で出会う男なんて普通ろくでもねえ奴らばかりだ。

上品そうな物腰にしては格好が幾分奇抜で、おつきの者の姿も見えない彼女も十分怪しそうに思えるが、これは言わない方が良さだろつ。

そんな風に無遠慮に彼女に視線を投げていたせいか、彼女は少しおびえた風に一步下がると改めて俺の顔を見た。

「あら、あなた・・・」

ぼつりと漏らした彼女の一言を不思議に思うと、彼女は相好を崩した。次第に彼女の表情に浮き上がってくる笑みはどきつとするぐらい美しく、そしてどこか幼さを感じさせるあどけなさで俺は心音が激しくなることを感じた。

「あなた、コンサート会場で。前の方に座っていらつしやつた方ではありませんか？」

コンサート会場？確かにそつだが、何故知っている？俺はそう疑問を返すと、彼女は失礼しましたといつてまたお辞儀をした。

「私はエルメナ。さっきの会場で歌っていた者ですわ。本日はありがとうございます。」

なるほど、そつか。先ほどからどこかで見たことのある顔だと思つていたのはそのせいだったか。彼女ほどの有名人なら人気のないところをこんな格好で彷徨っているのにも納得がいく。普段の姿で大通りを歩かれた日には警官が駆けつけるほどの騒ぎになつてしまつたろつ。

まあ、それにしてもとんでもない人物とぶつかつてしまったものだ。俺は少し焦るが、それを察したのか彼女は笑つて大丈夫ですよと言つた。

あれが私の最後の舞台ですから…。と彼女が言葉を漏らしたことは驚いた。

いや、殆ど耳に入つていなかったが、彼女の歌声は素晴らしいと誰もがそついう。それに、出る時に流し読みしていたパンフレット

にはそんなことは何処にも記載されていなかったように思える。

どういうことか。と俺が聞くと、彼女、エルメナは少し悲しそうな表情を浮かべ、いろいろありまして。と実に寂しそうな表情を浮かべた。

聞かれたくないことだったのだろう。俺はそれ以上は立ち入らないこととした。

それでは、俺はここで。といって俺は立ち去ることとした。

これ以上一緒にいられない。戦場で培った勘が俺にそう告げたが、その決意は彼女が次に口にした言葉であっさりと崩れ去ることとなる。

彼女は言った。

「私を連れ出してください。」
と。

冗談ではない、そんな面倒ごとに俺を巻き込まないで欲しい。俺はもうこりこりなのだ、何かを背負うのも誰かに背負われるのも。あの戦争だけで十分だ。

しかし、俺の意に反して俺の行動はそれとは全く逆の道を選んだ。何故そうなってしまったのかは分からない。感情が理性を拒否した。そして、身体が感情に従った。おそらくそういうことだったのだろうと思う。

俺は、迷うことなく彼女の手を取り、無言で彼女を導いた。裏路地のさらなる暗がりへ。誰も追いつけない未知の世界へ。

俺は彼女を導いた。

2・巻き込まれた陰謀

大学の寮に戻ることは出来ない。あそこは二人暮らしをするようには出来ていないし寮規則がそれを禁じていた。

ならばどうするべきか。最初考えたのがどこかのホテルだったが、さすがに二部屋取れるだけの持ち合わせはないし、こんな若い男女に一部屋を提供するほどホテルも甘くないだろう。すぐに警官が飛んできてそのまま豚箱行きがせいぜいだ。

だったら最後に選ぶ方法は…。結局友人に頼る以外に他がなさそうだ。

俺は、物陰に彼女を隠し暫く待っているように言いつけた。彼女は黙って従い、その場にしゃがみ込んだ。

俺が向かうのはあいつ等がいるカフェだ。場所は分かっている。俺たちが立ち寄るカフェは毎回同じだった、今回は雰囲気を変えて別なところに言っていないことを祈ろう。既に帰宅していないことも祈っておくか。

とまあ、いろんなことを祈りながら俺はカフェのドアを開いた。はたしてその祈りは聞き届けられ、連中はよく分からない話題に熱く議論を交わしている最中だった。その中に割ってはいるのは気が引けたが、なにぶん時間がない。

すまない、少しいいか。

と声をかけると彼らはすぐに会話を中断して、俺が気が変わって一緒にいることを選んだことを歓迎した。

しかし、俺はそれは違うと言わなければならなかったし、俺の目的はエドだけだった。

すまんが、エドに急用だ。すぐに来て欲しい。

そう伝えるとエドは救世主を見るような目で俺を見た。どうやら、すこし居心地が悪かったように見える。ならばちよっどいい。

俺は他の者達が抗議する暇を与えず、とりあえず全員分の紅茶代

にぶらすおつりを机にたたきつけるとエドをつれてさっさとカフェを後にした。

レジスターにいた店員に声をかけられるが、お代はあいつ等が払うとだけ告げて外に出た。

彼女はそこでじっとしていた。少し息苦しそうに見えるのは息も止めていたからだろうか。まったく、そこまで警戒する必要はないというのに、どういう育てられ方をしたのだろうか。

俺は彼女を連れ、ひとまずエドに詳しい話をするため二人で良くいく行きつけのカフェに足を向けた。

俺の視界の端は俺たちをつける数名の男を確認していた。エルメナを追ってきたのだろうか。それにしてもさっきまで一人にしていた時に連れ戻せばいいものを。ということは、目的は別にあるということか。

まったく、やっかいな者を連れ込んだもんだぜ。エドも巻き込んでしまつて申し訳ないと思うが、残念なことに今頼れる人間は彼だけだった。

彼女が礼の歌姫だと知った時はさすがのエドも度肝を抜かれたようだった。それにしても、舞台で見るより若く見えるな。と俺がこぼした時には怒り出すかと思つたが、エルメナは悪戯っぽい笑みを浮かべ、

「女は化粧で化けることが出来るのですよ。」

とウインクで答えた。

普通の男ならそれで彼女の虜になつてしまふそうだが、俺はそれより切実な問題があつたためわりとマイルドに捉えることが出来た。彼女はかなり面白くなさそうに頬をふくらませたが、俺は放っておいた。

そして、エルメナはあのコンサートを最後に逃げ出すつもりだと話すと、エドは更に仰天した。少し面白いな。

普段は意外に冷静であるはずのエドがここまで取り乱すのはなか

なか楽しい。結構俺は人をいじめて楽しむ人間なのかもしれない。少し気をつけるべきか。

そして、俺がエルメナは何者かに追跡され、それはどうも彼女を取り返そうとする連中ではなさそうだ。その言葉を聞いて驚愕に目を開いたのはエルメナだった。おそらく気がつかれていない者だと思っていたのだろう。しかし、あれだけあからさまに行動されれば嫌でも分かる話だ。

このカフェに来る道もかなり遠回りをし、時折人が通るような道ではない道さえも通ってきたため追っ手はまけたと信じたい。

伝説の狙撃手を打ち落とす人間を甘く見てもらっては困る。この時ばかりはあの戦場にいたことをありがたく思った。

さてと、一通り現状を把握し終えた俺はエルメナに向き合い、彼女を問いただすこととした。おそらく彼女はあの連中が何者で何が目的で彼女を追っているのかを知っているはずだ。

しかし、彼女は口を噤んだ。無理もない。しかし、これからそのやっかいごとに巻き込まれ、それを引き受けた俺たちに黙秘を続けるようでは君を信頼することは出来ない。

俺の強い口調に彼女はうなだれる。エドはそんな俺に何も言わないからには奴も同じ意見なのだろう。

俺とエルメナの視線同士の戦いが始まる。そして、最終的に折れたのは彼女の方だった。

彼女は呟くように、まるで独り言を言うようにそれを語り始めた。身の危険を感じたのは少し前からだという。曰く、舞台稽古中の上から物が落ちてきたり、ヒールに切り込みが入れられていたのに気づかず階段から落ちそうになったり、交差点で待っている所もかが背中を押してきたり。

最初は同僚の嫉妬によるいじめかと思っていた。しかし、それも次第に命が危つくなるほどのものになるにつれその線はないと確信するようになった。命を狙われているなんてただの気のせいだと楽屋の同僚達は口をそろえる。しかし、こんな状況が続くのであれば

とてもではないが舞台に立つことなど出来ない。

だから彼女は逃げ出すこととした。

そして巻き込んでしまった俺たちに深く詫びるが、俺はそれはかまわないと言った。むしろ俺もエドを巻き込んでしまったのだ。彼にどれだけわびを入れても許される物ではないだろう。

そういつとエドは声を上げて笑った。

「何を今更。僕達は元々お互いに迷惑を掛け合う関係じゃないか。」

こいつの胆力は大したものだ。俺は初めてこの友人を尊敬し、この友人に引き合わせてくれた運命に感謝した。エルメナはまぶたに涙を浮かべただひたすらありがとうと繰り返した。俺は女の涙には弱い。エルメナへの対応はエドに任せ・というよりは押しつけ、俺は今後の対策を考えることとした。

「それにしてもやつかいであることには変わらないね。ここもいつまでいられるか。」

ようやくエルメナが落ち着いた頃には俺の思考もいい感じに堂々巡りを始めた頃合いだった。俺はとりあえず無駄な時間を使って考えたどうでもいいような提案を一通り話し終えると、エドがまとめるようにそういった。

まあ、それは結局俺が考えたことなど何の役にも立たないということの答えなのだろうが、その通りであるので俺は特に何も反論しなかった。

俺たちは注文したはいい物のすっかりと冷めてしまった紅茶をすすりながら、ひとまず何処に行くかを健闘した。

当然大学には戻れない。このままだと暫く授業をさぼることになるが、二人ともそれを気にするほど優等生ではない。エルメナは俺たちが大学に行っていることを知って驚いていたが、それは当然のことだ。

普通一般市民は義務教育後は職業訓練学校に1年通いすぐに職を
探すもので、それより上の教育、高等教育に大学教育を受けられる
者はよっぽど少ない。俺の故郷の奴らも今では殆どの奴が町の工場
で働いているか、家業を継ぐ修行しているかのどちらかで、故郷か
ら初めて大学入学者が出たと有名になつたほどのものだ。

一応、俺の肩書きを話しておいたが、彼女はそれを知っていた様
子で。ただ、それが俺だと言うことには大層驚いていた。少しいい
気味だ。

それにしても、二人とも親無しだということを知りて少し驚いた
が、今の次代ならそれも良くあることだと言われるとなるほどそう
かと思つた。サムもカリスも妻がいて子供もいたらしい。二人の子
供も俺と同年代だと良く聞かされていたので一度会つてみたいと思
つた。父親を亡くしてその二人はいまどうして過ごしているのか。
二人の死を間近で見た俺には彼らに会いに行く義務感のようなもの
があつたが、半ば俺のために死んでいった二人のことを思うと足が
その方向に向いてくれない。

せめて俺が官僚になつて国を帰ることが出来れば、何かの償いにな
るのではないか。俺が今までがんばつて来れたのもそれが多分に
含まれることもあつた。

そういえばこの半年間自分のことにかかりきりで友人の身の上話
を聞いたことがなかつた。エドは気さくな奴だがこれは少し注意し
ておいた方がよいな。

話を元に戻そう。

エドの話によると、エドは元々地方の出身で大学の寮以外に拠点
に出来る場所をもっていないらしい。エルメナも同じようなもので、
母親の実家も今は遠いところにある。

俺一人なら、どんな廃墟も荒野でも隠れて眠れる自身はある。し
かし、兵役の経験がない二人にそれを期待するのは酷な話だし、そ
れは最後の手段にしておきたい。

ともかく、今は者を集めないといけないうのかもしれない。連中の

武力がどの程度かは分からないが、万が一それに対抗できる者をもつておくのと持つておかないのでは話が違いすぎる。それと万が一のための毛布と水筒、後は携帯食か。

忙しくなりそうだ。最近見つけた戦場の残り物を密売する店に寄つていくのがいいかもしれない。資金を得るために銀行に行く必要もある。

とりあえず最初は銀行かな。という俺の提案に二人はうなずき、支払いを済ませることとした。しかし、そのために席を立とうとした俺たちの目に映ったのは、物騒な物腰の黒服の集団がドアから中をのぞき込んでいる姿だった。

幸いなことにこの場所は入り口からはわかりにくい場所にあるためすぐに見つかる危険性はない。それに、連中もここに俺たちがいるという確信を持つている様子はないため、包囲されていることもないだろう。

入り口から出ることは出来ない。なら、トイレに窓があることを祈るか、店主に頼み込んで通用口に案内してもらおうか。

通用口は既に押さえられている可能性もあるが、正面から打つて出るよりは100倍はましだ。

俺たちは視線でそう話し会つと、周囲からの怪訝な視線にめげず姿勢を低くしてトイレへと向かった。

もちろん、勘定はおつりが来る程度の金を机の上に置いておいてだ。飲み逃げで警察の世話になりたくない。敵は一人で十分だ。

幸いなことにトイレには人が通れる程度の窓があり、窓外にも人の気配はしなかった。

ひとまず追っ手を振り切った俺たちはなるべく人通りの多い広い道にでて銀行を探した。

「とりあえず服を買う必要があるね。」

というエドの提案にうなずき、密売店へいく前に服屋に立ち寄ることにした。

そういえば俺たちが着ていたのは大学の制服だった。他の学校よりも特徴的なこれは俺たちの身分をさらけ出す。これはますます大学に帰ることが出来なくなってしまうたな。後々面倒なことにならないといいが、とエドと話しながら俺たちは適当な服を選びエルメナが着替え終わるのを待った。

それにしても女の買い物とは何故ここまで時間がかかるのか。俺たちは追っ手が来ないかどうか冷や冷やしながら入り口を行ったり来たりしていたが、店の奥から姿を見せたエルメナの格好をみて逸れも吹き飛んだ。

というより、エルメナ。それは何の格好だ？

当の本人は、え？何か違ったといわんばかりに自分の服装を見回したが、

「普段着と同じような者を選んだつもりなんだけど。」

と平然と口にした。エドは嬉しそうな顔で眼福眼福とそれを見ていたが、俺は痛み出した額を抑えて、側に積んであった特価品の者を適当につまみ上げると、こっちにしろといってそれを投げ寄せた。

エルメナはええーと抗議するが、そこは敵スナイパーをい殺した時の俺の視線で黙らせることが出来た。

ヤレヤレ、あいつはいつたいたいという過程で生まれ育ったのやら。今時ピンクのふりふりドレスで街を歩く人間が何処にいるというのだ。しかもかなり胸元が開いて、肩から背中の中まで露出し、ドレスと同じ色の二の腕まで伸びるグローブをしているのだから手に負えない。パーティーに行くんじゃないんだ。

ひょっとして、あいつトンデモねえお嬢様何じゃねえか？という俺の言葉にエドも苦笑するしかなかった。それにしてもあいつ、結構着やせるんだな。強調しているとはいえあれだけ胸があるとは驚きだ。

俺の思考も少し明後日の方向に行きかけたのを何とか奮い起こすと、普通の町娘の姿に戻ったエルメナに、それでいいと一言だけ告

げて店を出ることとした。

それまで着ていた物は少しもつたいなかったが、店の方で処分してもらったこととした。

ちなみにエルメナを睨んだ俺の視線は相当に怖かったらしく、彼女もしばらくは思い出して背筋を振るわせていたと言っらしい。こいつを黙らせたい時は暫くこの方法でいってみるとするか。

3・終わりへの足音

いろいろと話し合いを重ねた結果、俺たちは極力人の来ない場所に隠れることとした。そうになると、セオリーはやっぱり港の倉庫かな。

と、明らかに映画の見過ぎであるエドの意見だったが、それ以外に思いつくところがなかったため仕方なく俺たちは路面電車や乗り合いバスなどを經由し港口へ向かった。

大陸の西海岸に面するこの都市は巨大な港がそびえている。その一角を占める貸倉庫の群れは季節によつては水揚げされる海産物や海外からもたらされる工業製品や食料などで埋め尽くされるが、今の時期は海が荒れるため立ち寄る船も出て行く船も少なく、港は酷く閑散としている。

俺は吹きすさぶ風と寒々しい波の時化する音に身を震わせる。確かにここには人がいないし、季節柄から空きである貸倉庫であれば進入することさえ出来ればいくらでも隠れ家にすることが可能だろう。ただ、何日ここにいられるかが問題だ。

そして、俺は二人には秘密にしている思惑があつた。

ただ逃げるだけでは何の解決にもならない。連中の足取りを追い、奴らが何を持ってエルメナの命を狙うのか。俺はそれが知りたかつた。

何処の倉庫に身を潜めるかに関しては少し喧嘩になつてしまった。あくまで身を隠せることを重視して港の奥の奥、普段なら人が絶対立ち入らないような場所を候補に挙げるエド。あくまで住みやすさと暖かさから、空調機能がつけられた倉庫を希望するエルメナ。しかし、俺はそのどちらも採用しなかつた。

エドの主張する場所では退路を確保することが難しい。狙撃手の基本は敵が観察できる場所と退路が確保できることである。つまり、俺たちはより完璧に敵の裏をかくためには特に連中の動きを監視で

き、さらにいざというときには敵の追跡に合うことなく撤退できなければならぬのだ。

そしてもう一つ、普通の人間ならこの場所に潜むであろうと予測されない場所というのも重要な要素だった。

連中を監視できると言うことはこちらにも監視を受けるリスクを負うと言うことだ。そんな危険なことはしたくないというエドを説得し、あくまで居住性を求めるエルメナにピクニックにきてんじやねえんだとしかりつけるのには骨が折れた。

最終的には元前線兵を信じるといつて半ば無理矢理納得させる始末。少し関係にしこりを残す結果になったかもしれないが、生き残れるならそれでもいい。

俺たちは数時間かけて倉庫街を練り歩き、俺が納得できる場所を探り当てようやくそこに腰を落ち着けた。

火をたくわけにはいかなかったが、倉庫には従業員が寝泊まりするためのスペースと幾らかの毛布が設えられていたため寝泊まりには苦勞することはなさそうだ。

俺はひとまず安心すると日没をまつた。

そうして、俺たちの潜伏生活が始まったわけだが、当然のことながら順風満帆に行くはずがなかった。

いや、最初の一日目や二日目は二人ともまだピクニック気分である程度楽しんで日々を過ごしていたようだが、三日目にもなると蓄積された疲労で二人ともあまり喋らなくなった。

特に、日中は倉庫に籠もりきりで極力音を立てずに過ごさなければならず。日没後夜になると交代で朝まで見張りを立て、俺は時折倉庫を抜け出して、この倉庫街の見取り図の作成と密売店で購入したもので簡単な罫を設置する作業に追われた。

それにしてもここは広大だ。さすがに港区と呼ばれる地区のおおよそ4割をカバーするだけの規模を誇る港が持つ倉庫街であるといえる。俺を持っててもここを完璧に把握するのに4日も時間がかかってしまった。

しかし、幾つかよい知らせもあった。俺たちが陣取った倉庫は周囲にあまり音を響かせない場所に建てられているようで、これなら少し騒いだところで波と風の音に消されるだろうと見当をつけた。

いや、さすがに試すだけの勇氣は持てなかったが、もしもエドとエルメナが本当の限界を迎えれば景気づけのパーティーをしてもいいとも思い始めた。

それにしても、あの戦場に比べればここはまだまだ天国に違いない。

あの頃は3日間何も口にするものがない状況は殆ど当たり前のようにだったが、ここには暖をとる場所もあり雨と風をよけるための建物もある。街で買い込んだ保存食と缶詰は当面2週間分は蓄えられているし、従業員用に置かれている冷蔵庫にはまだ使える食材も残っていた。

これで不満を言うのは贅沢だろう。少なくとも俺にはそう思えた。

しかし、二人の不満は日を追うごとに蓄積していきとうとうその時がやってきた。

思ったよりも缶詰の消費早かったため、何か食い物はないかと他の倉庫からいろいろとくすねてきた帰り、倉庫の扉を開けようとする俺の耳が、どうやら中で二人が声を荒げて口論をしているようだと告げた。

やっぱりか……。半ば予想はしていたが、現実にはあって欲しくなかったことが起こったことに俺は少しばかりため息をつく、かなりの勢いをつけてドアを蹴飛ばし開け放った。

突然の音に二人は身を縮こませて、その音源におそるおそる目を向けた。敵の襲来かと思っただけだが、そこに立っていたのは間違いない。うことなく俺だった。

食料を見つけてきた。俺はただぶっくらばうにそう告げると、手に抱えていた缶詰や干し肉、冷凍保存されていた魚をシートの上に置いた。戦場では誰もが驚喜するはずの言葉に二人の反応はぎこち

なかった。

ヤレヤレ、しかたがない。俺はため息をつく二人には特に何も言わずにかねてより考えていた計画を実行に移すことを決めた。

二人が荒むのはおそらく食事のせいだと俺は踏んでいる。戦場ではどうしようもないという感情と無駄に体力を使いたくないという考えからそういうことはあまり起こらないのだが、やはりしつかりと調理されたものでない食料ばかりを口にしていると人の心は荒れていくものだ。

俺は食材から適当なものを選ぶと、倉庫の奥にある調理場へ足を進めた。実は、来た時にこの床下の収納庫に幾つかの酒類が隠されていることを知っていた。今日はこれと暖かい料理で宴会でもするか。後に響かなければいいのだが俺は心配するが、それは間違いない。後々良くない結果を残すこととなる。

いきなり奥に引っ込んで火を使い料理のようなことを始めた俺を不思議そうに眺めに来る二人に、出来るまで休んでいる、今日の歩哨はなしにする。と一言だけ告げて調理場から追い出しておいた。

あの二人には俺がどう映っただろうか。エドの友情とエルメナの信頼に傷をつける覚悟はとうの昔に付いていたが、やはり気になっってしまう。

俺は手早く魚の背を開き、内臓を一つずつほぐしていった。既に血抜きがされていたため手はあまり汚れなかったが、それでも硬い骨を砕くのには文字通り骨が折れた。

こいつは頭ごと煮込んでメインにしよう。缶詰からホワイトソースを取り出すと、予め熱しておいた鍋に魚の切り身を載せ塩と胡椒を少量振りかけ暫く表面を焦がし、そこにホワイトソースを流し込んで。

少量酒を振りかけておくと臭み消し、煮くずれを防げると調理兵の奴から聞いたことを忠実に実行しながら今度は肉に取りかかることとした。肉といっても牛や豚のものは手に入らず、それならせめて子羊ぐらいはないものかと探してもみだが、あいにく手に入った

のは鶏の胸肉だけだった。胸肉は淡泊で少しエネルギー源としては不満だった、せめて滋養のある肝臓はないものかと探ってみたがそれもなかった。

本来は煮込んで味をしみこませておきたいが、それほど味の出る出汁も作れそうにないためこれは単純にバターと胡椒で焼くだけで終わりそうだ。

冷蔵庫の野菜は使い切つてしまい、前菜のサラダを用意することは出来なかったが、何とかカビの生えていないパンを入手したのでそれを添えておこう。

デザートなどと贅沢を言っではいけないが、どういつわけか白桃の缶詰が一つだけ見つかったのでどこかの器に移し冷蔵庫に入れておくことにした。

魚が煮上がり、鶏肉もいい感じの色合いで焼き上がった。本当は添え物にジャガイモも欲しかったがしかなかった。味見をしてみると、美味いとは言えないが悪くない。これならあ

いつ等も満足できるだろうと高をくくると、それらを適当な皿に移し、冷暗所に保存されていた安そうなワインを片手に厨房を後にした。

二人とも今の今まで大人しく眠っていたようだが、さすがに温かい料理の匂いにつられてすぐに飛び起きた。

目が生き生きしている。やはり、荒んだ時はこれが一番だ。

俺は自分の選択が正しかったことに胸をなで下ろすと、少しぎこちない笑みを浮かべ、さあ今夜は大いに騒ごうぜ、と親指を立てこれ見よがしにウィンクまでして見せた。

その仕草があまりにも滑稽だったのか二人とも腹を抱えて笑い始めた。時には道化を演じることも重要だ。やはり、笑顔のあるところには災いはやってきにくくなる。しかし、災いの元は着実に俺たち近づきつつあることを俺は心の隅で悟っていた。

今、風の音と共に何かヒュッとはじける音がほんの僅かに聞こえた。あれは、俺が仕掛けてやったトラップが作動した音だ。すぐ

そこまで来ている。しかし、今は楽しもう。どちらにせよ、終わりはもう目前に迫っているのだから…。

夜明けが勝負時だと何となく決めていた。俺の出来損ないの料理を美味しい、美味しいといいながら舌鼓を打ち、安くて品の悪いワインをまるで特上酒のような塩梅で口にする二人を見て俺は密かに胸の中で謝った。

おそらく俺はこれからお前達に地獄を見せることとなる。だけど安心してくれ、目的は果たす。絶対にな…。

すっかり酔いが回って眠りこける二人を見ながら俺は静かに、何の音も立てずに倉庫を後にした。朝日が顔を見せるまで後3、4時間ほど。俺はかじかむ手を擦り合わせながら夜の闇に足を踏み入れた。

4・裏切りの銃撃戦

俺たちが寢床にしていた倉庫の正面。全く同じ企画で構成されたその構造物は大同小異ありつつもその内装は同じだ。

俺は、予めあけてあった倉庫の脇の切れ目に身体を滑り込ませ中に進入した。闇に目を慣らし、月明かりを星空の光を頼りに倉庫全体を一度確認する。大丈夫だ、敵が潜んでいる様子はない。

俺はその脇に設えられた鉄製の階段を足を潜めて上り、その二階にあるガラスの付いていない窓から外を見下ろした。

闇の中に動く者が二つ、三つ。既に敵は俺たちの潜伏場所を割り出し奇襲の準備をしている頃だろう。

俺は側に置いておいたものを取り上げると、ゆっくりとそれを肩に押し当てその上部に設えられた望遠鏡をのぞき込んだ。

ボルトアクションライフル
手動装填式小銃。これはサムの見のそれとは違う。あれは捕虜になった時に敵に取り上げられ、終戦と共に燃やされてしまいこの世には存在しない。出来ることならボルトかトリガーの一部でも回収できれば良かったが、俺たちは鉄条網の向こう側に行くことは出来ずただ悔しい思いでその炎を見上げることしかできなかった。

戦争は俺から多くの者を奪い取っていった。友達も居場所も思い出も、命もろとも奪い去っていった。

今でも目を閉じればありありと思いつかべることが出来る。カリスの最後の表情、サムが吹き飛ぶ瞬間。色あせることのないその究極の時の映像はただそれが現実にあったということだけを告げ、俺は心を閉ざす。そうすればうすぐくことはない。

感覚が戻っていく。これはまるであの廃墟で奴とやり合った時と同じだ。

奴は三日三晩、いや、考えようによつてはそれよりもずっと長い間あの下に這い蹲っていたはずだ。その目的はただそこを通る敵兵を撃ち殺すことだけ。あいつは何を考えて引き金を引いていたのだ

ろうか。ただ人を殺すためだけに？既にあいつは狂人と化していたのか、それとも自らを完璧な機械として仕立て上げたためにその運用に疑問を持つていなかっただけなのか。

俺の手で殺してしまっただ奴からその真意を聞き出すことは出来ない。そして、俺もこの一時だけはあいつと同じ類の人間となる。俺はただ目的を果たすための機械であり、この身はそのための道具。銃床を押し当てる肩も、照準を除くこの目もこの小銃ライフルに備えられたただの部品に過ぎない。その目的は、究極の時を以て最強の一撃をリリースするため。

小銃は俺の身体を介して地面と接合された。鋏トックスより硬く、ネジ（ボルト）よりしなやかに溶接より確実に。

俺の戦いは今この時を以て静かに幕を開いた。

探り込むように細かく動く敵の行動は空が白み始めると同時に一度納まった。少しだけ意識が夢の側へとシフトしていたようだ。俺は込み上がるあくびと無理のある体勢から来る吐き気を同時にこらえると、再び望遠鏡に目を向けた。

敵は俺に気づいていない。この一晩でそれは確信が持てるようになった。目の前の倉庫の中に少し細工をし、連中の目には三人とも酒によって寝込んでるように見えているだろう。

俺があのと時奴にくれてやった目くらましと同じことだ。やはり、あれは良くきく。連中の戦力をざっと見渡してみると、全員が完全武装しているわけではなかった。

おそらく人数は10人足らず。多くて8人といったところだ。先の戦争で軍が使用していた短機関銃サブマシンガンが2挺、それと一般的な小口径リボルバー拳銃が4挺に後の奴は警棒かナイフで武装しているだけに過ぎない。

やろうと思えば一人で全滅させることも出来る。しかし、それはしてはいけない。目的を果たすためにはやるべき人間は3人だけだ。まず短機関銃を持つ2人と、連中を指揮しているやつの計3人。そ

うなれば連中は最低限の仕事をはたして撤退するしか他がなくなるだろう。その時こそが勝負所だ。それをし損じれば全ては水の泡。

俺は乾いた唇を軽くなめると、その時が来るのを待ち続けた。

連中が無警戒に倉庫に近づいてくる。

あの中心にいる男がおそらく司令官だろうと俺は当たりをつけた。拳銃を所持し、短機関銃サブマシンガンを持つ二人の男に指示を与え、他の者達はその周りを囲んでいる。間違いなさそうだ。

まずは短機関銃の男から。まだ遠い、もう少し近づけただしゆっくりだ。俺は二日前に所彼処に仕込んでおいた吹き流しに目を向けた。

あれで風の向きと力を測る。配置にかなり苦勞を強いられた、特にそれと気づかれないうように巧妙に仕込んでおくことに骨が折れた。後は連中があの側を通り過ぎれば。一人の命が天に召されるというわけだ。

最初に狙うのは司令官の右側にいるかなり大柄で腕の良さそうな男だ。サングラスに目深にかぶった帽子とその表情を読み取ることが出来ないが、おそらく奴は俺に命を握られていることなどつゆにも予感してないことだろう。

許せとは言わない。ただ、俺たちのために死んでくれ。

吹き流しが左右に揺れている。少し風が荒れているのか、その方向は定まらないが、微風であることには間違いはない。時折吹く突風が気になるが、朝の内にはそれも少ないと見込んで俺は小銃を奴の脳天から少し上、レイトクルに刻まれた目盛り一つ分ほど上に合わせた。

少し風が強まった。左からの風、風速は3ほど。ならば、半目盛り右。風速4、4分の3目盛り。奴が吹き流しの側にやってきた。

俺は迷わず引き金を引き絞り、最初の一撃をリリースした。

久しい感触が肩を打ち付ける。少し前までは当たり前のように毎日感じていたそれは俺があの頃とは遠いところにいるのだなと嫌でも実感させられた。

そして0.1秒も経たないうちに俺がねらいをつけた男は何の抵抗もなくもんどり打ちひれ伏し、そして大地を赤に染めた。

俺はそれを確認するまでもなく遊底を操作し次弾を装填する。ねらいより5ミリ横にずれた。ならば修正してもう少し横にずらせばいい。さつきまで荒れていた風は今は打って変わって安定して吹いている。風向き、左からの風、風速4。

突然のことに一瞬だけ連中の動きが止まった。警棒を持った男は比較的早く状況をつかみ取り、倒れた男の手から滑り落ちた短機関銃を拾い上げ、所かまわず撃ちまくってきた。倉庫のとたんにたまが当たる音が甲高い響きで倉庫街に響き渡るが、落とした衝撃で少し銃身にひずみがあったのだろうか。どうねらいをつけても定まらない照準に辟易している奴から目をそらし、次の目標にスコープを合わせた。

風向き変わらず、風速3.5。先ほどの着弾結果から次弾の着弾店を予測し俺は再度引き金を引き絞る。目標撃破。大地を血で汚すものが一つから二つに増えた。

撃ちまくれという司令官の叫びを耳にし、俺はその場から退却を決めた。

短機関銃の吐き出す甲高い銃声と、拳銃から奏で出る少し気の抜けた発射音が辺り一面に鳴り響く。

連中は素人なのか？俺を相手にあんな打ち方をしてはいくらたまがあつたところで無駄になるだけだというのに。

倉庫のとたんを貫通する威力すらない拳銃弾の跳弾音を小気味よく耳に入れながら俺は入ってきた入り口とは別の場所に空けられた隙間から外に出た。

敵は俺の位置を完璧には把握しきれていない。

とにかく所かまわず怪しげな所に銃弾を撃ち込んでは無駄な骨を折っているだけだ。その家の1人はその跳弾に当てられて気を失う始末。馬鹿な連中だ。こういう場合は身を潜めてじっくりと相手が何処にいるか探すのが唯一確かな方法だというのに。

隠れるのは得意でも隠れられるのは苦手か。戦場を経験している者がいればあのような愚拳には至らなかつただろうに。

俺は少し拍子抜けして肩を落とすと、建物の影を縫いながら目的の者を探した。連中が使っている車はすぐに見つかった。ご丁寧に倉庫街の入り口の駐車場に止められており、これで探すのに苦労するなら捜し物は一生見つからないと言っほどのものだ。

ともかくすぐに見つかつて良かった。

俺は、ひとまず安心して次の隠れ場所に向かった。

連中は俺の探索を諦めたのか、さっきの一斉射撃でしとめたと思つたのか。いつまで経っても反撃しない俺に安心して再び歩み始めた。もしも後者と考えたのならとんだ楽観主義者共だ。ともあれ、連中の車に少し細工をするだけの時間を稼げたのには安心した。

これで次は、連中がエドとエルメナをさらってくれば俺の計画は完遂する。

おそらく二人は俺を恨むだろう。今頃外で起こった銃撃に飛び起きて外に出て逃げるか、そのまま隠れているべきか口論になっているのかもしれない。その恐怖は俺も経験したことがある。しかし、連中はいきなりあの二人を殺すことはない俺は踏んでいる。その証拠はエルメナを追っていた連中があのだという確信から来ている。

実際の所、連中はエルメナと俺が出会ってからもう前にも何度かあいつを殺すチャンスはあつたはずだ。そうにもかかわらずエルメナは死ぬことなく、連中はただあいつを追いかけているだけに過ぎなかつた。あいつ等の目的はエルメナを殺すことではなく捕縛することだと俺は確信した。その証拠にさっきから銃声が聞こえてこない。だが、心配しているのはエドのことだ。エルメナは死ぬ可能性はないと思うが、エドの場合はその確証は取れない。連中がエドの命に何らかの価値を見いだしていない限りはエドの運命は決まってしまうだろう。もしそうなつてしまつたら、大丈夫だよエド。

全てが解決したら俺も側に行くよと決めたから。お前一人であの世を渡らせない。

そして暫くして、静閑に沈む倉庫街の一角に女の甲高い叫び声が響いた。俺は小銃を構え直し望遠鏡でそれを確認する。

俺たちが寝食を共にしていた倉庫から司令官と思われる男に捕まり、腕を無茶苦茶に振り回して抵抗するエルメナが俺の名前を呼びながら泣き叫んでいる。胸が痛んだ。女の涙は俺を狂わせる。

俺は震える手をしっかりと押さえつけ、小銃を固定する。エドは生きていた。銃を構える男の目の前で両手を挙げ、歯を食いしばって屈辱に耐えていた。俺を恨んでいるだろうか。何も言わずに出て行った俺を、お前は裏切ったと思うだろうか。

司令官の男はエルメナを押さえきれず、部下であろう二人の男にその身柄を預けた。エルメナが奴から離れた。今しかない。

俺は引き金を絞った。三度目の爆音と衝撃が肩を振るわせ、その反動と共に飛翔した鉛と銅の円錐ははつきりとした軌道を描きその眉間に吸い込まれていく。

男が何の予備動作もなく倒れ込んだ。一瞬全員が放心するが、エドの行動は早かった。エドは銃を構えていた男に体当たりを加え、その手から銃を奪い取った。

いけない、それではお前の寿命を減らす。いくら銃を持っていても多勢に無勢、しかも連中は短機関銃さえ持っている。早まるな。

突然に跳ね上がる心音を深呼吸で押さえつけると俺は再度望遠鏡をのぞき込み、その照準をエドの手のひら。正確には彼が握る拳銃に合わせ、間髪入れずに引き金を引いた。

エドの拳銃が音を立てて跳ね飛び、エドは腕を押さえ込んだ。出血はしていない。何とかなったな。

連中はあまりのことに一瞬行動が取れなかったが、エドが既に銃を持っていないことに気がつくよと再びエドを拘束した。

「ちくしょー！何だよ！！」

それは俺に対する罵りなのだろうか。当然だ。ある意味俺は連中

の手助けをしてしまったような者なのだから。

俺はその場から離れた。指揮官を失い混乱した連中はこっちに反撃することも考える余裕がなかったのか、腰を抜かしつつ撤退を開始した。

連中の車までは俺の方が近い。

俺は小銃をしっかりと小脇に抱えると、先ほど細工をしておいた車のトランクを開け放つと中に置かれていた毛布のような者を頭からかぶるとすぐにそれを締めた。仕掛けた細工とは単純なものだ。単にトランクを中から開けられるようにしただけのこと。焦った連中は例えトランクを開けても俺の存在に気がつかないだろう。これで準備は整った。

すっかり混乱し、訳の分からないことをわめき合う奴らが車に到着したのは少し寝不足でうとうとし始めた頃だった。

さてと、連中は俺たちを何処に連れて行ってくれるのか。そこにはいったい誰がいるのだろうか。俺は目を細め少し邪悪な笑みを浮かべて車が発進するのを待った。

4・裏切りの銃撃戦（後書き）

実は最終回にはなりませんでした。済みません。

5・密やかな足跡

車は随分長い間走っていた。途中まで頭に浮かべていた地図によると、どうやら連中は郊外の森林地帯に移動しているのだと漠然と分かったが、そこに何かがあるのかまではさすがに分からなかった。

しかし、森林地帯か。確かに人を殺して死体の後始末をするにはもってこいの場所だ。少し当てが外れたかもしれない。連中はただあそこでは殺さなかっただけで、場所を変えて殺すつもりだったのかも知れない。それだと、少し面倒なことになりそうだ。それにしても、この車のサスペンションはあまりいいものではないな。平坦な道を走っている時はそれほど振動を感じることはなかったが、タイヤがガリガリといいはじめる砂地では非常に不規則な振動が頭に響く。ダンパーの粘性が適切ではないのかもしれない、スプリングはしっかりと稼働しているがその振動を抑制する力が少し足りていないように感じられた。

エンジン音と排気音、そして車軸がきしむ音があまりにもうるさかったため後部座席に座っているであろうエドとエルメナの様子をうかがうことは出来ない。状況が状況であるため抵抗せずに大人しくしているだろうが心配だ。

車の振動が緩やかになった。舗装された道に出たのだろうか。しかし、良く耳を澄ましてみるとこの車の側を走る他の車両の音が聞こえない。ここがもしも森林地帯だとして砂地の道を抜けた先にこのような整備された道があるとはどういうことだろうか。しかし、いつまで経ってもゆるむことのない車速は目的の場所までまだ距離があることを語っていた。

俺はライフルを抱え込む。こいつは今まで俺に忠実だった。まともな整備をしてやる暇さえもなかったが、もう少しだけ俺に従っていて欲しい。まるで断崖の道に沿って進んでいるような曲がりくねる車に何度か身体をぶつけながら、俺は目を閉じ、ただその時が来

るのを待ち続けた。

俺はこの数年間。敵国から解放され、ようやくこの国の土を踏めるようになってから数年間銃を手放すことはなかった。俺の実家のある辺境の村は山と森に囲まれ、湖のある場所だった。父は村役場の職員だったが休日になると良く森に狩りに出かけていて、俺もそれに良く付いていったものだ。小銃ライフルの扱いはそこで習い、獲物の見つけ方、銃の構え方、引き金の引き方を教わった。今俺が持つ小銃ライフルは俺が何年前かの誕生日に父から譲り受けた物だ。だから俺はこいつのことをよく知っているし、こいつも俺のことをよく知っている。だが、俺はこいつに人を殺させたことに少しの罪悪感を感じていた。もしも父がそれを知ったらなんと言うだろうか。友を助けるため、己の正義を果たすために敵を殺した俺をほめるだろうか。それとも人殺しの息子を持ったと行って嘆き悲しみ俺を憎むだろうか。出来ることなら憎んで欲しい。そうしてくれる限り、俺は自らを狂気のこちら側においておくことが出来るだろう。俺が最も恐れること、それはこの日常を失うことではない。日常などほんの些細なきっかけさえあれば劇的に変化してしまうということを俺は知っている。俺が最も恐れることは、そんな日常にありつつも人を殺すことでしか自分を保てなくなると言うことだった。

どれぐらい眠っていたのだろうか。突然身体にかかる急激な衝撃に俺は飛び起きるように目を覚ました。その衝撃はまさに車が急制動をつけて停止したということに気がつくのに数秒の時間を要した。やはり自覚していないところで疲弊していたのだろう。数年ぶりの緊急事態に身体がまだなれていなかったのか、それを衰えだと感じてしまった俺は思わず舌を鳴らしてしまった。

ドアが開かれる音がした。それと共にうわずった男達のヒステリーとも取れるような叫び声と、それに抵抗する一組の男女の声が周りの環境に反響して聞こえる。

閉ざされた空間、それも周りを硬い物で被われた空間にいるのか。静かな辺りの雰囲気の中では革靴が立てる足音さえもはつきりと聞こえる。

遠ざかっていく足音が徐々に消えていく頃に、思い鉄の扉を開閉する慌ただしい音が響いた。そして静寂が訪れた。

俺は自分の鼓動と呼吸の音を耳で確かめながらトランクを僅かに開き、細い隙間から辺りをうかがってみた。

暗闇になれた目が突然襲いかかった光になれるまで俺はじっと動かず、視界がクリアになるのを待った。

どうやら、コンクリート張りの駐車場のような場所に止められているようだ。まるで大規模砲撃にでも耐えるために作られているのか、その雰囲気は一度だけ立ち入ったことのある軍の最深度地下施設を彷彿とさせる。

誰もいない、人の声や足音はおろか何か息づく音さえも聞かない。

俺は、ゆっくりとトランクを開ききり身体を極力低くして外にはい出た。

しかし、ここは何処だろうか。もしもこれが地下の施設であるならこのような大規模な場所が、例えば辺境にあるとしても何の噂にもならないことはおかしいと思う。いや、そもそも噂話にとんと興味を示さない俺がそれを言うのは間違っているのかもしれないが、この空間には何か言いようのない焦臭きなくささが隠されているように思えた。とにかく移動しよう。駐められているのは俺が潜んできたこの車と少し離れたところに駐車された馬鹿に高級そうな車だけ。この建物にはあまり人がいないということになるのかどうかは分からないが、俺は少なくともそれを願った。

今日はもう三人も殺してしまった。もう、これ以上誰かを殺すのも殺されるのも嫌だ。

俺は立ち上がり、壁伝いに一つしかない出口に向かって歩いていった。

扉の向こうはすぐに階段だった。飾り気のない壁にはすすけたシミと僅か等ひび割れが走り、凹凸の少ない天上には裸電球が二、三個無造作に吊されている。見上げると階段の終わりに設えられた扉が親指の間程度の大きさに見えることからその階段がいかに長いものか想像がつくだろう。

姿を隠す所など一つも見あたらない。俺にはそれがまるで誰かに導かれているように思えて気味が悪かった。あまりゆっくりはしてられない。俺がぐぐってきた扉と同じあれも鉄製の物だろう。さらには周りはコンクリートの石造りの壁と天上に被われているから今更音に気を遣う必要もないかもしれない。

俺は来た時の慎重さをかなぐり捨て、かなりの足早で階段を駆け上った。

鉄扉に耳を付け、どうにかして向こうの様子を確かめようとするが、返ってくるものは沈黙だけ。その先には誰もいないということか、息を潜めて待ち伏せをしているのか。それとも音自体が遮断されていると言うことか。鍵穴で向こうが伺えれば良かったのだが、残念なことこの扉につけられている鍵はそこまで旧式のものではないようだ。しかし、本来なら出口であるこちら側の扉につまみ型の鍵がつけられているとはどういうことだろうか。それは鍵を穴に通すものではなく、鍵を必要とせずただ回すだけで解錠できる代物だった。まるでこれでは外からの侵入を防ぐのではなく、中にいるものを外に出さないためにつけられているようではないか…と考える俺は身震いした。

そうか、ここは監獄なのだ。誰が、何を目的に建造したのかは考えたくもないが、ここは外にいられては都合の悪い者達を閉じこめておくための牢獄なのだ。

それがあの捕虜収容所のようなぬるい場所ではないことは一目瞭然で、俺はすぐに鍵を回しドアノブを回し、念のため中をうかがった。

それは俺が想像した監獄とは全く異なる風景だった。一言二言で言うと、金持ちの豪邸という様相だった。今にも制服を着込んだ侍女イトが廊下の角から姿を現しそうなほど次代を間違えた様式ではあったが、所々に見える電話や消火用散水機スプリンクラーは俺が過去へトリップしたわけではないということを伝えた。

人が来る気配はない。俺は廊下に身を躍らせ、絨毯地の床に付いた砂を含む跡を目で追いながら足を急がせた。

それにしても警備が少ない。要所の広い廊下の交差する地点には確かに短機関銃を持った黒服が立っていたこともあったが、物々しい姿のわりにその警戒心はあまりにも低く、少し別のことで気を反らせてやるだけで容易に道を開けたことには呆れるばかりだ。衛生兵でもあれよりはましな歩哨をする。歩兵にとっては最も屈辱的な言われもすんなりと当てはまりそうなその姿には彼らは雇われの警備員なのかもしれないという予想が付いた。

思えば俺たちを襲った連中も入念な訓練を受けた兵士だとはとても思えない様子だったことから、彼らの雇い主は彼らを使い捨てにするために雇っているのかもしれない。いや、それとも俺を陥れるための罠なのか。戦場に楽観論は不要だとよく言われたが、それを思うと背筋が凍る。

だが、風呂に入りたい。それは何も止まらない駆け足に呼応して肌に浮かび上がってくる汗に辟易したというわけではない。問題は体臭だ。人の体臭というものは特徴的なもので、警戒心の強い草食動物なら50メートル離れた人の匂いにも敏感に反応しまっしぐらに逃げ去っていく。人の嗅覚はそれほどきまされたものではないが、それでも発見される可能性は極力なくしておきたいというのが人として当然の心理だろう。

俺は少し荒くなつた息づかいを何度かの深呼吸で整えると、砂の混じつた足跡の終着点に行き着いた。

足跡が消えていく先には今までに見た扉とは少しばかり趣の違う扉が行く手を遮っていた。鉄製の一枚板の本体にそれを補強する鉄

帯が二本斜めに交差していて、それと本体を接合するリベットが隙間なく列を作り上げている。これでは爆薬を使わない限り真つ当な手段で開くことは叶わないだろう。よく調べるとそれを閉ざしているものは細めの鉄棒をUの字に曲げたものと鍵穴が施された四角い鉄箱で構成された、所謂南京錠だった。大きめのワイヤーカッターであれば難なく切断できる程度のそれは扉自体の堅牢さに比べると何というか、あまりにも幼稚に見えたがあいにく切断できる道具を俺は持っていない。ライフルで撃ち抜けば難なく破壊できそうではあるが、ここでそれをするのはあまりにもリスクが高い。

仕方なく俺はライフルの銃床に差し込まれているクリーニングキットから細くて丈夫な針金を取り出すとそれを鍵穴に合うように適当に曲げた。鍵開けは得意ではない。出会った数週間でバラバラになった同僚から暇つぶしに教えられた技術だが、そいつに言わせればあまりにも手際が悪すぎるとのことだった。だが、やるしかないか。

俺は鍵穴を壊さないように細心の注意を払うと、中に埋め込まれた小さなカムを針の先や腹を使って押し込んだり引き上げたりして一番ちよつど良い具合を探っていた。

錠前が甲高い音を立てて床に転げ落ちたのはそれから10分ほど時間が経過した時だった。

5・密やかな足跡（後書き）

次こそは最終話です。

6 ・再会・別れ(前書き)

また完結できなかった。・少し終わらせかたを思案中です。もう
少しだけおつきあいください。

6・再会・別れ

重い扉をやつとの事で開いたその先には何の明かりもともされていないただの闇が広がっているだけだった。いや、あるのは闇だけではない。よく目をこらすと、その隅の一角からは僅かではあるが光が漏れ出ていた。そして人の声もする。その声に引き寄せられ、俺はそれを暗がりから様子をうかがった。

二人はそこにいた。手錠で手を縛られているわけでもなく、腰掛ける椅子に身体を固定させられているわけでもなく、口に何らかの嚙くっわをかまされている様子でもなかった。

「あの人は私たちを見捨ててしまったの。」

エリアルはそう呟く。エドはそんな彼女から目を背け、白い床を見ながら首を横に振った。

「いや、あいつは何か考えがあつてこうしたはずだよ。」

あいつが自分たちを裏切るはずがない。エドは何故俺をそこまで信じるのだろうか。見捨てた見捨てないの話を抜きにしたところで俺は二人になんの相談もせず二人を利用した。ただ、俺がこの件を仕組んだ黒幕の顔とその理由を知りたいだけのために。ここで二人が生きていることはおそらく軌跡に違いない。真つ当に考えればとつくの昔に殺されていてもおかしくはないのだから。

俺は盗み聞きを止め、二人の目の前に姿を現すこととした。二人が座らされていた部屋は狭い、鉄格子がないだけでこれは独房のよくな雰囲気を持っている。天上から吊されているのは一房の裸電球のみで、それがどこからか進入した空気の流れに逆らわずゆらゆらと揺れている。

鉄格子のない牢獄に姿を見せた俺を二人は始め自分たちを閉じこめた者達かと思つたらしく、エドはエリアルを背中にかばいながら身を構え、エリアルは今まで自分が座っていた椅子に手を置きいつでもそれを振りかぶれるように準備した。

無事のようだな。良かった。と俺が投げかけた声に二人は一瞬間食らったかのように目を見開くと、腰が抜けたようにその場にうずくまってしまった。

大丈夫か？と、俺は二人の腕を持って立ち上がらせとりあえず椅子に座らせた。

「ああ、何か気が抜けてしまつてね。」

情けないとエドは苦笑いを浮かべ、リアルは俺の表情をまじまじと覗き込んでいた。

何か珍しいものでも？と聞くと、彼女は表情を変えることなく、「どうやってここまで来れたのかしら？」

と聞いてきた。俺がお前達が載せられていた車のトランクに潜んでだと答えると、二人は呆れながらも驚いていた。

「全く気がつかなかった。良くそんなことが出来たね。」

エドの言うことももつともだが、気がつかれていないと確信していたからこそ、そうしたのだと答えた。そして、エドの手を改めてみると彼は手のひらを包帯で巻き付けているようだった。おそらく俺が小銃で拳銃を撃ち落とした時についた傷だろう。それほど重傷には見えないが、俺は謝った。

あなときはそうするより他方法が見つからなかった。下手に銃を持って多勢に無勢の中やり合うより、いつそのこと武器を持たずにいた方が命の安全は保証される。

エドはそのことに関しては何から考え納得していたようだが、彼の不機嫌はそれが原因ではなかったらしい。彼は声を荒げて、俺に詰め寄った。

「何故僕達に相談してくれなかったんだ？君は全て自分の思惑と目的でやれたかもしれないが、僕達はそうではなかった。君に頼るしかなかったことは認めるし、君の決定には逆らわない方が良いことも理解している。だけど、こんなやり方をされては納得がいかないよ。彼女がどれだけ怖い思いをしたか君が分からないわけがないだろう？」

背負わせるわけには行かなかった。何をどう正当化しても俺はあの三人を殺す以外の方法を見いだすことが出来なかった。俺は殺人者だ、だかお前達にその片棒を担がせるわけには行かなかった。相談しなかったことは悪かったと思っっている、だが相談するわけには行かなかったということも分かって欲しい。

「殺したことに後悔しているの？」

エリアルが言った言葉に俺は閉口した。彼女はとても答えにくい質問をする。同じ質問を俺と同じ立場の人間に聞いたとしたら、はたしてどんな答えが返ってくるのかと俺は想像した。おそらく彼らの多くは、「考えないことにしている。」と答えるだろう。しかし、俺ははつきりとエリアルの目を見てこう答えた。

後悔はしていない。
と。

それには多分に嘘が含まれていることは二人も理解しているだろう。人を殺して後悔しないのは殺人鬼の所行だ。俺は殺人者ではあるが、殺人鬼になった覚えはない。それだけが唯一俺が依り部としている所なのだから。

エリアルはただ一言、「そう。。。」と答え、言葉を切った。エドはうつむく彼女の肩を抱き、頭を胸に抱え込むように抱きかかえるとその手であやすように彼女の背中を二、三度叩く。

「それじゃ、脱出しよう。こんな所からは早くおさらばするのがいい。」

エドの提案に俺は首を振ることしかできなかった。

「なぜ!？」

俺はまだ目的を果たしていない。この件の黒幕の顔を拝んでもいないし、奴の思惑を知ることにも出来ていない。それが果たせない限り、俺はこの場を去ることは出来ない。

だが。。と更に言いつのるエドを制して、俺は二人を車の所まで送る。その後は二人で逃げてくれ。俺は目的が果たせれば何とかして戻る。と、有無を言わさぬ表情でそれを告げた。

二人は口を噤むしかなかった。それに、自分たちが居ては俺が目的を果たす枷にしかならないことを理解しているのだろう。エドは苦辛に口をかみしめながら首を縦に振った。

既に退路は確保してある。俺はエドに鍵がなくても車を動かす方法を伝えると、奴らの注意が俺の方に向くまで車を動かさないようにと念を押した。そういえば、鍵無しで車を動かすのはサムが得意だったな。そのおかげで俺たちは何度か戦場への足を得ることが出来たと俺は懐かしく思った。

俺は二人を引き連れ牢獄から逃れ、来た時より3倍の時間をかけて地下の駐車場へと続く階段へ案内した。館内は夕食時になるのだろうか。時折廊下には複雑に調理された豪華な料理の香りが漂い、警備体制が更に緩くなっていた。

だが、そうなると二人が脱獄したことはすぐに知れ渡るだろう。抜け出すのは夕食が終わり、牢獄に食事が運び込まれた後まで待つ方が良かったかもしれないと俺は後悔するが、ここまで来てしまった以上引き返すのは危険すぎる。

二人が階段を下り、その先にある扉を抜けた音を確認すると、二人の無事を心の内に願い、俺は再び行動を開始した。

黒幕がいる場所は目星が付いている。砂の混じった足跡は途中で二手に分かれ、一つはエドとエリアルルの居た牢獄へ、もう一つはそのそばの大きな扉の向こうへと消えていった。

おそらく帰還の報告をしに行った者達と、二人を牢獄へと監禁しに行った者達で別れたのだろう。先に牢獄へ足を運んだのはまず、二人の身柄を確かめておきたかったからだ。いざというときに人質にされないためということでもあるし、万が一の場合は俺だけの命で済むようにという配慮だ。おそらくそれを聞いたらエドは怒るだろう。だが、こればかりは巻き込むわけには行かない。

だが、黒幕の元へ殴り込む前に一つだけやっておかなければならないことがある。

俺は、廊下の所々に設えられている最新型のテレフォンを抱える

と、とりあえず人が来そうにない場所を探し作業を始めた。このテレフォンは最近開発された録音機能を持つものだ。俺の通う大学の事務にも一つだけこれと同じものがおいてあるのを俺は知っている。その内部構造は比較的簡単で、少し機械をいじったことのある人間なら容易に改造することが出来る。

おそらくこれが切り札になるはずだ。俺は慎重に作業を進める。焦って部品を取り落としてはいけないが、あまりゆっくりも出来ない。

閉め切ったカーテンの向こう側からはいつの間にか日没を知らせる強い光が差し込んできていた。

日の入りまで後3時間強。間に合わせなければならぬ。

館が慌ただしくなり始めたのは日没後暫くしてのことだった。ドアの向こうから響いてくる男達の野太い声によると、二人がどうやって抜け出し、そして何処に行ったかはまだ知られていないようだ。つまり、俺が二人の脱出の手引きをしたこと。二人は既に車の中で脱出のタイミングを待っており、そして俺はまだこの館に残っていることを連中は知らない。

そろそろ、行動を開始するでしょうか。

俺は、即席の録音機をポケットの中で確かめ、スリング越しで右肩にライフルを背負いこんだ。

そして、車のトランクに無造作に放り出されてあった軍用の自動装填式拳銃トマチックハンドガンのスライドを引くとマガジン内に残されていたたまを薬室へと送り込んだ。後退したスライドの前方からライフルリングの刻まれた銃身がニョキッと一本だけ顔をのぞかせる。典型的なショートリコイルのテイルト・バレル方式であるためか、引き出された銃身はまるで首をかしげるように上を向いた。俺にはなにやらその仕草が滑稽に映り、少しだけ口元をゆるめる。

初段を装填し、俺はグリップの後方、撃鉄の下方に取り付けられた安全装置セイフティーを上トリガーに押し上げ、スライドを固定すると共に引き金を固

定した。新開発の拳銃とは違い、幾らか旧式であるこれは撃鉄戻しデコッキングレバーが搭載されていない。作動方式も単操作シングルアクションであるので再度撃発には時間がかかってしまう。しかも、弾倉も単配列シングルカラムのため装弾数自体が少なめだ。素早く操作し、確実にねらいをつけるためなら多少危険であつても撃鉄を起こしたまま携帯するしかない。俺は撃鉄が起きたままである拳銃を慎重に腰のベルトの間に差し込む。

念のため先ほど分解整備を行つてみたが、特に目立つた損傷はなく撃鉄を操作するバネの強さも良好だった。軍用であるためか、その照準サイトは固定式だったため調整のしようはなかったが、至近距離で撃つのであれば問題はないだろう。

カビ臭い匂いの漂う書庫には人が隠れられるスペースがいくらでもある。しかし、彼らがこの部屋を搜索する様子はない。ひよつとすれば、この部屋が潜伏にはもつてこいの場所だと言つことを知らないのではないだろうか。なんとも、呆れた連中だ。これなら、俺の手引き無しで二人は十分脱出できたかもしれない。

連中の数は少なくとも5人。多く見積もつても10人もいないだろう。この広い敷地を僅か10人で二人を搜索するにはあまりにも人手が足りない。全員が散開してくれるならよりいっそう俺が動きやすくなる。

俺は人の声が響きつつも人の気配の薄い廊下をゆっくりと歩みながら目的の部屋へと向かった。

6・再会・別れ（後書き）

ちなみに、彼の持つ拳銃のイメージはコルトM1911A1です。一般的にはコルト・ガバメントの名称として有名で、彼のアニメ、ルン三世に登場する銭 警部も一時期使用していました。（個人的にはあまり好きではありません）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5333f/>

戦場の兵士2 = 平和な戦場・帰還兵の戦い =

2010年10月10日21時13分発行